

国税庁長官賞

米百俵の精神

税金に支えられた私たちの未来へ

新潟県立長岡高等学校

二年 後藤 苺瑚

先日、国税庁ホームページの税の学習コーナーを見ていたときのこと。「年間教育費の負担額」という部分が目にとまった。公立学校の児童・生徒一人あたりが義務教育九年間と高校三年間の計十二年間で受け取る額は、約千二百三十万円であり、義務教育費国庫負担金と教育振興助成費（学校での教育の運営に使われる）を合計すると年間約四兆円程度の国の歳出が教育のために使われているという。調べていくうち、「多くの税金が教育に使われるのは、米百俵の精神と同じ考え方があるからだ」という考えが浮かんだ。

「米百俵の精神」とは、私の住む長岡市に幕末から伝わる故事である。戊辰戦争で焼け野原となった長岡藩に三根山藩（現在の新潟市西蒲区）から米百俵が見舞いとして送られてくるが、長岡藩の大参事小林虎三郎は米を食用にせず売却し、得た資金で国漢学校の新校舎を開校した、という話だ。小林虎三郎は、お腹を

すかせた兵士たちに米を配ることよりも、教育のための資金にして人材を養成することに重きを置いた。すぐに利益や効果を得られるのではなく、教育に資金を使い将来活躍する人材を育てるという考え方は、現在多額の税金が教育に使われている理由と重なるのである。

私たちが教育を受けることでは、すぐには目に見える効果は得られない。今の私たちには社会に貢献したり、社会を変えたりする力はない。しかし、多くの人間も名前も知らない、どこに住んでいるかもわからない人——の納めた税金によって、私たちは教育を受けることができている。目に見えないたくさんの人々に支えられて、教育を受けさせてもらっている。そう考えると、私たちが毎日教育を受けられるのは当然の権利などではなく、支えてくれていて人々への感謝の気持ちを忘れてはならないのだと強く感じる。そして、私たちはいつか恩返しをしなければならぬ。私たちが税金を納める側になったとき、教育を受けられたことで学んだこと、身についたことを生かして、社会に貢献していくこと、税を納めていくことこそが、私たちが支えてくれた人への恩返しなのだ。

米百俵の精神の話には続きがある。米を売ったお金でつくられた学校は、後に医学博士の小金井良精、海軍の山本五十六元帥などの、新しい日本を背負う多くの人物を輩出した。私たちも彼らのように、税金に支えられて得た学びを生かし、未来で活躍できる人になりたい。